

小麦品種「せとのほほえみ」の概要

農業振興課

1 育成経過

- ① 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 西日本農業研究センターにおいて、パン用小麦系統「中系 10-28」を母本、「10Y1-048（後の「くまきらり」）」を父本とする交配を行い、その後代から育成（令和 5 年 10 月品種登録出願、令和 6 年 1 月品種登録出願公表）。
- ② コムギ縞萎縮病（Ⅰ、Ⅲ型）※¹抵抗性と秋播性（播性Ⅳ）※²を持ち、栽培特性に優れる。品質面では奨励品種「せときらら」よりも子実タンパクが高く、製パン性も良好。

※1 土壌伝染性のウイルス病で、発病すると生育が抑制されて減収する。山口県の小麦産地の全域で発生が見られる。薬剤防除が極めて難しく、有効な対策は抵抗性品種の栽培のみとされている。

※2 生育の進展に一定の低温を必要とする特性。秋播性品種は冬季の気温による生育ステージの変動が小さく、暖冬年でも栽培管理しやすい。



写真 登熟期の様子（令和 8 年 5 月 1 日撮影）



せときらら



せとのほほえみ



せときらら

写真 子実の外観

2 現奨励品種「せときらら」と比較した特徴

- ① 出穂期は 2 日遅いが、成熟期は同等。
- ② 稈長がやや短く、倒伏程度が小さい。穂数が少なく、やや低収。
- ③ 粒がやや細長く、外観品質はわずかに劣るが、容積重が重く、子実タンパク質含有率はやや高い。

*表 農林総合技術センター「せとのほほえみ」の調査結果参照

3 奨励品種決定の理由

以下の点から、小麦「せときらら」からの品種切り替えによって、収量及び品質の安定・向上が期待でき、生産者の経営安定や高品質麦の安定供給につながると判断できる。

- ① 現奨励品種の小麦「せときらら」と比較し、コムギ縞萎縮病の発生が少なく、耐倒伏性が優れ、子実タンパク含有率が高いこと。
- ② 製パン性に優れ、実需者から問題なく取り扱えることが確認され、販路の確保が見通せること。

表 農林総合技術センター「せとのほほえみ」の調査結果（令和4～6年産の平均値、本調査）

品 種 名	出 芽 良 否	出 穂 期	成 熟 期	稈 長	穂 長	穂 数	収 量	同 左 比
	1-5	月/日	月/日	cm	cm	本/m ²	kg/a	%
せとのほほえみ	1.0	4/4	5/31	91	8.4	496	60.9	92
(標) せときらら	1.0	4/2	5/31	94	8.3	531	<u>66.6</u>	<u>100</u>

品 種 名	倒 伏	赤 か び 病	凍 霜 害	千 粒 重	整 粒 歩 合	外 観 品 質	容 積 重	子 実 タン パク 質 含 量
	0-5	0-5	0-5	g	%	1-6	g/L	%
せとのほほえみ	0.1	0.8	0.2	40.5	99	2.7	812	11.4
(標) せときらら	1.4	0.8	0.5	41.5	98	2.2	799	10.9

- (注) 1. 出芽良否は1（良）～5（不良）、倒伏の多少、凍霜害及び病害は0（無）～5（甚）で示した。
2. 外観品質は1～6で示し、概ね1～3が検査等級の1等、4～5が2等相当となるようにした。
3. 子実タンパク質含有率は近赤外分光法で測定し、水分13.5%で換算した。